

子宮頸がん検診における ASC-US 導入後 6 年間の
変遷について

○ 栗田和香子¹⁾、塚原孝¹⁾、佐藤奈美¹⁾、佐藤美賀子¹⁾、神尾淳子¹⁾、森村豊²⁾、古川茂宜³⁾、添田周⁴⁾、渡辺尚文⁴⁾、藤森敬也⁴⁾

公益財団法人福島県保健衛生協会¹⁾、一般財団法人慈山会医学研究所附属坪井病院婦人科²⁾、福島厚生連白河厚生総合病院産婦人科³⁾、公立大学法人福島県立医科大学医学部産科婦人科学講座⁴⁾

【目的】

福島県における子宮頸がん検診にベセスダシステムを導入した後の変遷を知ることが目的として、ASC-US と判定された症例について検討した。

【対象】

平成 20 ～ 25 年度の 6 年間に当施設で実施

した子宮頸がん検診受診者のべ457,264人中、ASC-USと判定した650例（0.14%）を対象とした。

【方法】

6年間をベセスダシステム導入直後の前期（平成20～22年度）と後期（平成23～25年度）の2期に分け、1. ASC-USの判定数、判定率、2. 年齢構成、3. 精密検査結果を病理組織診結果とHPV検査（HC2）結果について比較検討した。前期・後期の比較は χ^2 検定を用い、危険率0.05未満を有意差ありとした。

【結果】

ASC-US判定は、前期309例（対受診者率0.13%）、後期341例（0.15%）であり、ASC-Hを含むASCの率は前期0.15%で後期は0.23%であった。すべての細胞診異常例（要精検）中に占める割合は、前期18.6%、後期16.8%であった。年齢構成は、20歳代が前期／後期：0.51%／0.48%、30歳代は0.26%／0.29%、40歳代は0.12%／0.19%であり、20歳代が最も多かった。病理組織診結果は、前期277例中CIN1は80

例 (28.9 %)、 CIN2 以上は 85 例 (30.7 %) であ
った。一方、後期は 228 例中 CIN1 が 82 例 (36.0
%)、 CIN2 以上は 45 例 (19.7 %) であり、前期
と後期の CIN2 以上の検出に有意差が認められ
た ($p = 0.006$ 、 χ^2 検定)。HPV 検査は、前期 / 後
期 : 194 例 / 251 例で実施され、その結果、151 例
(77.8 %) / 184 例 (73.3 %) が HPV 陽性であっ
た。HPV 陽性例の病理組織診結果は、前期 CIN1
が 45 例 (30.6 %)、 CIN2 以上は 47 例 (32.0 %)
であり、後期 CIN1 は 61 例 (37.0 %)、 CIN2 以上
が 28 例 (17.0 %) であった。HPV 陽性例におい
ても CIN2 以上の検出に有意差が認められた ($p = 0.010$ 、 χ^2 検定)。

【まとめ】

日本産婦人科医会からの報告では、ASC は
全報告の 5 % 以下であることが期待されてい
る。当施設は、ASC-H も含めて約 0.2 % であり、
適正であった。また、ASC-US は、CIN2 から CIN3
と診断される例が約 10 ~ 20 % あると報告され
ている。前期は CIN2 以上が 30.7 % と高率だっ

たが、後期は 19.7 % であり有意に減少していた。多くの検討や経験を経て、細胞所見の整理がなされ、ASC-US 判定が確立されてきたと思われる。ベセスダシステム導入当初は、ASC-US の判定基準の解釈の違いにより ASC-H や SIL 例が含まれていたと考えられるが、年次経過により判定基準は適正化されてきた。